

森本治吉覚え書き

上代文学会の再建にあたって

高木市之助

「上代文学」がまた出ることになったのは、上代文学会再建の一環として誠におめでたいが、この機会に私は私なりに多少とも学会の成立に溯って考えてみることによって、反省もし期待もし、そして祝福もしてみたい。

永年東京に常住しなかった私は、ことまかにこの学会の成立のいきさつを知ってはいないし、多少知っていても今では忘れてしまったしするが、しかし私にはそれでいい。ただこの学会を生み出す動力となったのは何といつても森本治吉君だということだけははっきりして置きたい。こういうと当時創立に骨折った人々の功を無視するみたいに聞えるかも知れないがそうではない。そしてこの学会を生み出す動力として森本君ぐらい適任者はないとその時分思ったし、この考えは今でもほぼ変りはしない。

森本治吉は、(以下君をつけることは、何か偏向的に弁護してゐるみたいだから省くことにするが)昨年あんなに盛大な還暦祝いを催したくらいだから、少なくとも年齢的に治吉が先輩扱いにすることのできる国文学者はそうざらにはない。私もそのざらにない一人だが、更に彼の高校生時代を知っている先輩となるのもっと少ない。沢瀉氏もその一人だが、どちらかといえば私の方が少しばかり早く知ったといえるし、彼が大学生になって上京すると、丁度私がその講師として講義をしていて、彼は友人達とよく私のうちへ遊びに来たりしたので、少なくとも沢瀉氏に次いで私が当時の彼を一番よく知っていた先輩だとは言えるであらう。こんな昔話を持ち出すのも、つまりは、上代文学会を作る動力として彼ぐらい適格者は無かったという私の森本評価を確認して貰うために外ならない。

彼が五高の一年生として熊本の私のうちを訪れたのは白路という校内の短歌誌(今の白路の前身)を創刊するためだったから、別に上代文学とは関係なかったが、同行した数人の先輩や同級生の中で、一番印象的だっ

たのは、彼のこうした仕事に対する異常の情熱であって、阿蘇から噴き出すヨナが積つてうす黒く曇のよごれた六畳で、チャブ台兼用の応接机の向う側から生粋の熊本弁で話しかけるといふ背景の關係もあつてか、彼の発言が一番私を動かした。尤もそこへ集まつた数人は実に多彩であつて、その時分から、後の有能な、社長や行政官を予想させるに十分で、これ等の衆知が集まつた白路は忽ち学校の内外で評判になり、九州でも指折りの短歌誌になりおおせたが、それをひた押しに押し進めた、動力源のようなものは治吉に具わる、この一種特異の情熱だったのである。もちろん情熱とだけでは治吉のこの持ちものを表し得てはいない。もっと行動的で押しも強く、熊本的に骨っぽくてしかも女性には魅力的ですらあるもの、それを己むなく情熱と仮称するのだが、それは白路発足の動力となつたばかりでなく、適用範囲のすぐ広いもので、彼の学問の推進力となり、且つそれを性格づけたことは勿論、作歌の上にもこの治吉らしさが大きく役立つたと言える。しかしそんな表芸だけでなく、例えば対七高野球戦の応援団長として大挙鹿児島を襲つたのも、(野球には敗けたが)或いは、一大学生として、震災の年に熊本の大和座という大劇場で、東都復興のための映画興行に、四日間連日大入りだったのも、みんなこの独自の仮称情熱に支えられていると言えよう。彼の半架空自叙伝「万葉に生きる者」の中に「君は鈍才か秀才か」という一章があつて、そこで奨吉(治吉)は島木赤彦と

「森本君、君は鈍才か秀才か」

「私は鈍才でございます」

という問答をするが、彼の情熱はこのいわゆる「鈍才」(真に鈍才と認めたわけではないことを森本君にことわる。)ともどこかでつながっているし、もっと言えばそれは彼の第二歌集「耳」で

手を組みて寂かに定に居る像の内に燃えたる焰知りたし

と詠む彼の鑑真和上観とも無縁ではなさそうだ。そして彼のこの異常な持ち物が上代文学会の誕生にも中心的な動力として働いたと私は言いたいのである。尤もこの誕生への動力はそのまま誕生を阻む抵抗力となつても働いた。上代文学会という名前までが実は抵抗の苦い痕跡なのである。抵抗はしかし対外的にばかりではなく、内部にもずい分あつたし、内部では却つて漸次盛り上つて来たとも言える。こんな事情を小さなスペース

で物語ると、内幕をばく露するみたいな誤解を招きかねないからですが、抽象的に一言すれば、近年学会が一般に組織合理化された結果、発足当時そのままの機構や運営では間に合わなくなり、内容的に言っても、当初の理論や実践に安住することが若い世代を満足させなくなったというようなことになるのである。その結果上代文学会は、最近機構運営の面でも乃至理論実践の面でも、或る危機に直面する形となったが、幸に会員全体の懸命の努力によって、それを喰いとめる、というよりも乗り越えて今次の建て直しとなった次第である。これは上代文学会にとって喜ぶべきことであるばかりか、近年雲の如く興ってきた国文学関係の諸学会が一見頗る順調に進んでいるようで、実は類似の危機を孕んでいる実情の前に一つのモデルケースとして大きく参考になるのではないか。といっても上代文学会の再建がこれで完了したわけではなく、そこには今後の検討に待つものが至って多く、随ってまた、治吉の情熱はこの明日のためにも強く要求されていること必至だとして誰が気付いているのであろうか。

一体学会とは、言うまでもなく学問推進の場であって、組合や協会のように政治や経済を動かすための直接の機関ではなく、随って又、之に廻って各年代や諸階層の学徒が指導権を争ったりしてはならない。学会で学問は論理で追究されなくてはならないと同時に、情熱で愛育されなくてはならない。両者の関係が比喩的に言つて、一つの同心円に統一されることは理想に過ぎないとしても、内村鑑三の有名なたとえ話に随って、二つの中心を持った一つの随円に形成されることは必ずしも不可能でないことを、われ等の学会は現実に体験しつつあるようである。とすれば治吉の謂ゆる情熱も、学会の随円の構造式の一つの中心に値するが、唯彼の場合、それはあまりにも純粹で強盛なために、往々にして自意識過剰に陥り、とかく不必要に誤解されたり、抵抗を受けたりしたことも既に実験済みであらう。この点彼の側からも、もう一つの中心を形式する、鋭敏な論理や新鮮な構造は進んで耳を傾げるだけの、謂わば中和的寛容さが必要でありそうだが、同時にこのもう一つの中心からも、治吉の学会成長のための無類の情熱的動力源を過不足なく評価して明日に廻することは、この再建された大世帯を真に学会らしく育成して行くための、かけがえの無い一つの鍵でなくてはなるまい。

(妄言多罪)